

---

# あの事は誰も知らない

?鬼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あの事は誰も知らない

### 【Nコード】

N7458Z

### 【作者名】

? 鬼

### 【あらすじ】

慶介と香が乗っていたバスが突然バスジャックされる。

犯人の発した言葉。「殺し合って下さい」

慶介と香を含む、乗客全員を巻き込んだ事件。

この事件の真の黒幕は一体誰なのか？

慶介は事件の真相を暴く事は出来るのか。

(別のサイトからの移転しました)

## 第1話 終わりの始まり

あの事件はいまだにニュースに出る事はない。

あんなにたくさんの命がなくなつたというのに…

8月14日

すずきけいすけ

さとうつかある

鈴木慶介と佐藤香は幼馴染の恋人同士だった。

この日、二人はデートに行っていた。理由は香の誕生日だったからだ。

付き合つて2カ月になるが今日が初めてのデートだった。

「はあ…」

慶介は小さくため息をついた。

時刻は10時36分。

待ち合わせの時間からすでに6分も経過していた。

（遅いな…）

慶介は携帯を取り出し電話をしようとしたその時だった。

「慶ちゃん」

香の特徴的のかん高い声が聞こえてきた。

「ごめんごめん寝坊しちゃって」

香は笑顔のまま謝った。

「お前反省してねえだろ」

「えゝ反省してるよゝ……待った？」

呆れたように慶介が答える。

「当たり前だろ。後50秒も遅れてたらバス行つてたぞ」

「ごめんね」

香は舌をチロリと出した。

「さあ行こうか」

慶介が右手をスツと差し出す。

香は慶介の右手を握りながら答えた。

「うん初めてのデート楽しみだね」

「そうだな」

二人は笑いながらバスに乗った。

慶介と香がバスの中で、会話に花を咲かせていると、遊園地に到着した。

30分ほどかかっていたが、慶介たちにとってはあっという間に時が過ぎたような気がした。

香は遊園地に着くなり、テンションを上げ、嬉しそうに慶介の右手を引っ張りながら、園内を駆けまわった。

「あれに乗ろう」「これに乗ろう」「あそこでパレードをやつてるよ」

無邪気な子供のように嬉しそうな声で話す香。

慶介もそんな彼女の傍にいられるだけで喜びを感じた。

ブリクラにジェットコースター、お化け屋敷にパレード。

気がつくとすでに17時を回っていた。

楽しかった分、時間が経つもの相当早く感じるものだ。

「もう閉園時間もギリギリだし、帰ろうか」

「えー！ もう帰るの？ あとちよつとだけ…」

駄々をこねる香に強引に言い聞かせ、慶介は遊園地を後にした。

これからあんな事が起こるとも知らずに…

## 殺しあってください

「あゝ楽しかったね」

香は背伸びをしながら言った。

「ていうかお前はしゃぎすぎだろ。保育園児か？」

「そんなことないよ。慶ちゃんのが楽しそうだったよ」

二人はこの様な内容の会話をしながらバス停へ向かった。

慶介たちがバス停に到着すると同時にバスが停車した。

二人は楽しそうな笑みを浮かべながらバスへ乗り込む。

扉が閉まり、ゆっくりとバスが動き出した…。

バスが動き出してから間もない頃。恐怖のあの事件が起こるまでもう数分もない。

しかし時の流れは無情にも刻一刻と過ぎ去り、直前までは考えすらもする事がなかった“あれ”が始まった。

楽しく話す慶介と香の後ろの座席に座っていた男が、突然静かに立ちあがった。

黒いコートに黒いニット帽を被った男がゆっくり前へと歩いて行く。そして運転手の横に立ちこう言った。

「みなさんこのバスはある事をしない限り止まりません…」

バス内がざわつく。

「ふ…ふざけるな。何を言っているんだ」

意味が分からない、と言わんばかりに中年の運転手が男を睨みながら言った。

「そつだ！ 運転手さんもこのゲームに参加してください。運転は私がしますので…」

「ばかなことを言うな！ 代わる訳ないだろ！」

「そうですね…じゃあ力づくで代わらせていただきます」

そう言つて男は内ポケットから拳銃を取り出した。

「代わらないというなら仕方ありません。さよなら…」

「ま…待て！ 待つてくれ！ 代わる。代わるから撃たないでくれ」  
「そう言っていただけで何よりです」

男が立ったままハンドルを握り、その間に運転手は運転席から移動した。

運転席に座り、男はこう言い放った。

「私が隙だらけで殺すなら今だ！ と考えている人はいつでも殺していいですよ。私が死んだ場合、心拍数が停止した事がバスに仕掛けた爆弾に伝わり、このバスは爆発します」

「な…なんだって!？」

若いサラリーマンが驚きの声をあげた。

「そうだ！！忘れていたよ。運転代わって」  
運転を代わり男は黒いコートを脱いだ。

ジャケットの裏を見て、慶介は啞然とする。

なんとコートの裏に、何十と言う数のナイフがあつたのだ。

慶介の腕を掴み、震える声で香が言った。

「慶ちゃん…怖い……」

震えている香をギュッと抱きしめ、慶介が答える。

「俺だつて怖いさ…」

そんな会話をしている間に、男は客一人ひとりにナイフを配り始める。

もちろん香や慶介にも…。

そして男はこう言った。

「今から皆さんにある事をさせていただきます。そのある事とは…」

慶介の脳裏にとてつもない考えが浮かんだ。

（まさか！ 全員にナイフを配ったってことは……）

慶介は周りを見渡す。

どうやら他の乗客も分かっているようだった。

「みなさんで……」

ゴクリと慶介が生唾を飲み込む。

「殺しあつて下さい」

そして男はニヤリと笑い運転を代わった…。

### 第3話 動き始めたゲーム 最初の犠牲者（前書き）

少し短いかもしれませんがこれからも頑張って書くのでよろしくお  
願いします^^

読んでくださっている方々、ありがとうございます！



### 第3話 動き始めたゲーム 最初の犠牲者

「殺しあう!? ふざけるな! バスから降りる為に人間の命を何人も殺めろって言うのか!」

若いサラリーマンが怒声をあげる。

「ああ! すいません。まだルールを説明していなかったですね」

(こんな馬鹿げたやつにルールまで作るなんて野郎は何を考えてるんだ!)

慶介の感情は恐怖から怒りへと変わる。

沸々と湧きあがる怒りと言う名の感情に、慶介は支配されそうになったがなんとか自我を保つ。

「ルールは簡単。人を一人殺すとバスの外へ出られます。尚自殺して他人に脱出権をあげると言うことはできません。必ずナイフを握った手で自分以外の人間を殺して下さい。そして窓から逃げようとした場合バスの上に待機している私の仲間に殺されます。私を殺したら爆発しますからやめておいた方がいいですよ。ルールはこれくらいです。じゃあ頑張って殺してください」

バスの中には沈黙が訪れる。

もちろん誰一人として行動を起こす人間はいない。

それからにもおきないまま2時間が経過した…。

2時間も走り続けるバスの中、しかも乗っているバスがジャックされたのだ。

乗客のストレス、疲労はすぐに溜まる。

そんな状況の中、遂に乗客が行動を起こした。

小さな男の子と一人の女性。恐らく親子だろう。

重たく口を開く母親。

「祐ちゃん…お母さんを…お母さんを殺しなさい」

慶介は耳を疑った。

(やめろ…やめるんだ)

声を出そうとしたが出ない。

あの母親の決意が他人に物を言わせない程に固い決意なのだ。

「嫌だよ…嫌だよママ！」

「だめ！ 佑ちゃんこのままだったら何もできないまま二人とも死ぬわ…ママは佑ちゃんに生き延びてほしい。私を殺して！」

すると母親は子供の手を握りナイフを強く握らせた。

「ママ嫌だママ…ママ！」

だがいくら女性とはいえ大人だ。子供の力では振りほどく事は出来ないだろう…。

「佑ちゃんばいばい」

母親の目から一筋の涙がポツリと落ちた。

それと同時に母親は息子の手を思い切り自分の胸に近付けた。グサツと言う音と同時に血が飛び散る。

香はその瞬間に目を伏せ慶介の腕をギュツと握りしめた。

慶介の視界には床や窓、天井にまで飛び散った赤い血痕。

子供の泣き声が聞こえる。するとバスが止まりスーツを着た男が入ってきた。

子供の手を握り、スーツの男は強引に外へ連れ出す。

「ママ！ ママああああ！」

叫び続ける子どもの泣き声も、バスの扉が閉じられるとともに聞えなくなった。

あまりにもつらい現実だった…。香は目に涙を浮かべている。

それからいつ死ぬかも分からない状況下、乗客の溜まりに溜まったストレスが限界に達し、ゲームは大きく動いた…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7458z/>

---

あの事は誰も知らない

2012年1月12日22時54分発行